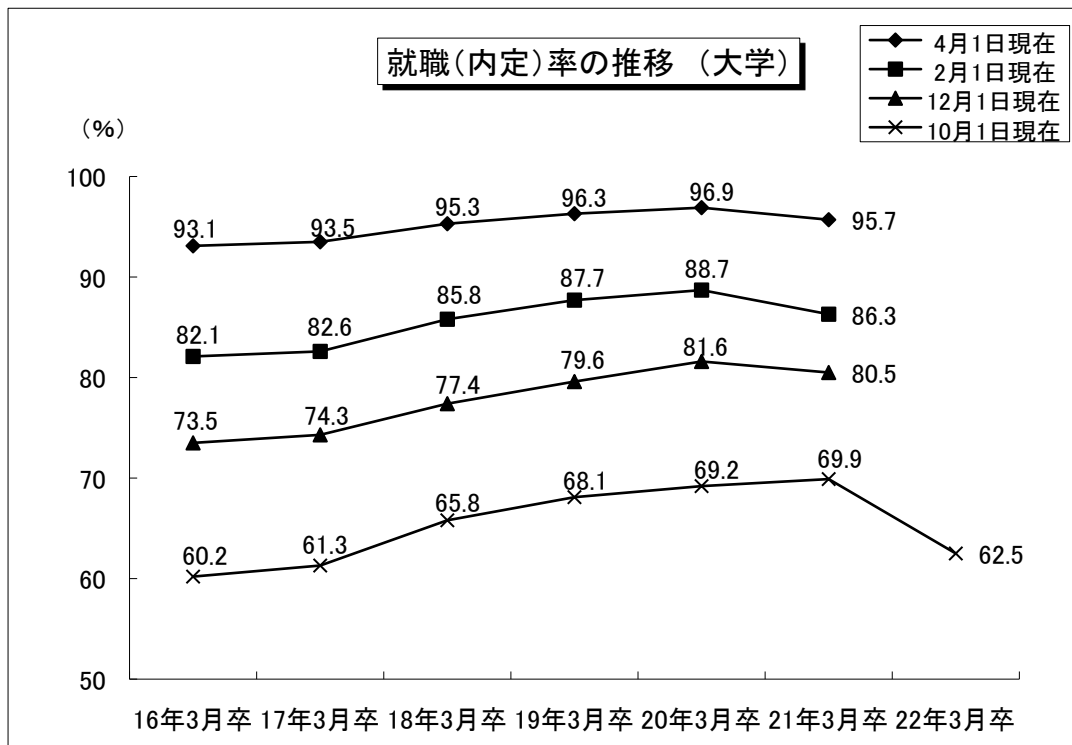


11 進路に対する満足は何に規定されるか

丸山 智子

はじめに

世界的な不況により、若者の社会への第一歩目となる就職活動が厳しい状況を迎えている。厚生労働省によると、今春卒業予定の大学生の就職内定率（2009年10月1日現在）は62.5%。前年同時期と比較すると7.4パーセントと大きく減少している。（下図参照）約16万人の就職先が未定で、バブル崩壊後の「就職氷河期」の再来とも言われる厳しい状況だ。



（大学・短期大学・高等専門学校及び専修学校卒業予定者の就職内定状況等調査 厚生労働省 職業安定局雇用開発課若年者雇用対策室）

この就職難の影響だろうか。私の周りにも、3月の卒業を間近に控え、就職先が決まっていない先輩がいる。その先輩方は、もう一年在学して来年就職活動に再チャレンジしたり、とりあえずアルバイトとして働きながら正職員の道を探したりされるようだ。先輩方のお話から、日本の厳しい就職事情が伝わってきた。しかし、いくら現実が厳しいといえども、すべての先輩が就職出来ないわけではない。うまく就職活動が進まなかった先輩方の一方では、十分満足のいく就職活動を終えて卒業を待つのみ先輩も沢山おられるのであ

る。では一体、就職活動を満足に終えられた学生とそうではない学生の違いは何なのだろうか。就職活動真っ最中の私にとって、とても興味深い問題である。

私は、社会学部の卒業生を対象に行ったアンケートを使って、上記の疑問をさまざまな角度から分析してみたいと思う。果たして先輩方の成功の裏には、その鍵となる行動や思考の傾向があるのだろうか。自身の就職活動の参考のためにも、このレポートを通しこれらのことをつきとめてみたいと思う。

ただ、この調査を進める際に忘れてはいけないことが二点ある。これらを忘れて数字から表わされる結果だけに振り回されると、結局は自分なりの就職活動が出来なくなってしまうかもしれないからだ。一点目は、先輩にとっての成功と私にとっての成功とは異なるということである。先輩の成功経験だけ頼らず、まず自分にとっての満足のいく就職とはどういうものなのかについて考えなくてはならない。二点目は、同じ行動を取っても、状況が違えば結果も変わるということだ。先輩の経験は先輩のいた状況でおこったものである。全く同じ状況にいる訳でない私に必ず同じ結果が起こるわけではないことをよく認識しておかなければならない。以上のことは、考えればすぐに分かることではある。しかし、自分一人で考える時間がゆっくり取れない就職活動の時期において、見失いがちのことでもある。経験や周囲に縛られて結局自分にとって満足がいけない結果にならないよう、以上の二点を私自身の肝に銘じておきたい。そして就職活動のヒントを探している多くの仲間とも、この二点を共有したいと思う。

以上、「はじめに」で私が述べたかったことは、このレポートでは、就職活動を満足に終えた学生、両者の属性や行動、意識の傾向を分析すること。そこから「就職活動の成功のカギとなるものが存在するのかどうか」「存在するならいったい何がそのカギであるのか」という問いへ答えを探してゆくこと。そして、この分析によって導かれる結論は、就職活動を行っていく学生にとって非常に貴重な手掛かりになるだけでなく、就職支援に関わる教育機関や企業などにも意義のあるものになると私が考えているということである。

それでは、就職活動を満足に終えられた学生とそうではない学生の違いは何なのだろうか。勉強や課外活動への取り組み、人間関係、アルバイト、いろいろな面から就職活動を成功して終わらせた先輩とそうではない先輩方を比較してみる。しかし少し考えても、私にはそれほど大きな差があるように思えない。ここでもう一度、問題を客観的に考えてみよう。ここまで私は、企業に就職を希望する身という立場からこの問題を考えた。今度はこの立場を取っ払って考えてみよう。すると見えてくるものがあつた。それは、第一志望の職に就職することが「進路に満足する」ことか？積極的な活動をした人と消極的にしか活動しなかった人、結果が同じでも自己評価が違うのではないか？という疑問である。

考えてみれば、進路に対する満足感は希望する将来像とそれに向かってどう取り組んだかによっても違う。ここに一つのデータがある（次ページの表）。卒業後の進路満足と就職活動経験の有無との関係を示したものだ。グラフを読み取ると、就職活動をした人としなかった人の進路に対する満足度の分布はほぼ同じであることが分かる。このデータは、学生がただ就職活動を終えることだけに満足を感じるわけではないことを

表している。自分の望む進路に自分の望むやり方で進む事が進路満足感につながっているのであろう。

q25[就職活動経験] と 進路への満足度 のクロス表

		進路への満足度			合計
		どちらかといえば		どちらともいえない	
		満足	満足		
q25[就職活動経験]	はい	180 51.6%	104 29.8%	65 18.6%	349 100.0%
	いいえ	27 56.3%	13 27.1%	8 16.7%	48 100.0%
合計		207 52.1%	117 29.5%	73 18.4%	397 100.0%

考察をふまえて、私は進路に対する満足感が次の二つのものに規定されると考える。ひとつ目は、個人の望む将来像に合致した職に就けたかどうか、ふたつ目は、就職活動への取り組み方に見合った結果がでたかどうかである。この二つを満たす形で就職活動を終えた人こそが就職活動に満足している、と私は仮定する。

11.1 分析方法

実際の分析方法を述べたい。まず、分析の対象とするのは、同志社大学社会学部を卒業する学生402人に対して行った第一回卒業生アンケートである。このアンケートは同一の大学・学部の卒業生へのアンケートであるために、卒業した大学や学部による影響が問いに与える影響が少ない。また、このアンケートでは同一人物の属性・行動・意識を入学前から学生生活、大学卒業時まで横断的に調べることができる点も調査にとって適当であるといえるだろう。

具体的に分析の核としてゆくのは、問29「あなたは卒業後の進路に満足していますか」という問いだ。それに対する説明変数は二つある。両方とも私がアンケートの項目を少し加工して作った。一つ目は、どれほど自分の希望に沿った企業に就職が決まっているかを表す志望合致度である。二つ目は、内定の数とそれをもたらした時期だ。

はじめになぜこの指標をつくったのかを述べて、その後で各指標をどの様に作ったか述べていきたい。卒業生アンケートの中で就職活動に関する項目は大きく5つに分けることができる。職場環境・志望理由・学生の取り組み開始時期・取り組んだ数・それに対する企業からの結果だ。前の2つの項目は、学生が就職先に求めるものを表している。これらは「個人の望む将来像に合致した職に就けたかどうか」を調べるために使えるだろう。職場環境については、内定先の環境を表すがそれが自分の望む将来像に合致していたのかは

表さないのここでは使用しない。残りの3つの項目は、就職活動にどう取り組みそれに対する結果がどうだったのかを表すため「就職活動への取り組み方に見合った結果がでたかどうか」を調べるために使っていく。ただ、このままでは一つの項目に4、5個の質問があるのでまとまった結果が出ない。また、取り組みを始めた時期に関して、そこで、私が必要だと思う質問事項とその結果をまとめ、新しい指標を作った。それが、志望合致度と内定獲得時期・内定獲得数である。

<志望合致度>

この指標は、問26(5)の「就職先の企業に応募した理由として、次のうちあてはまるものすべてに○をつけてください。」という問いの6つ選択肢、仕事内容・大学での専門との関連・給与・仕事と余暇のバランス・縁故・地域条件の中から、仕事内容・大学での専門との関連・仕事と余暇のバランスを抜粋して作ったものだ。給与・地域条件・縁故を除いたのは、進路満足度との関係が確認されなかったからだ。志望合致度は、就職先に対しどんなものを求めた人が自分の進路に満足しているのかを調べるのではなく、就職先に対する希望がどれくらい叶った人が進路に満足しているかを調べるものである。だからこそ、進路の満足度と高い関係がないものは全体のデータの志望合致度を計る場合に適さない。

次に、3つの選択肢をどうやって4点に換算したかについて説明する。まず、それぞれの選択肢は、応募理由として当てはまれば1、当てはまらなければ2の点数が与えられる。すべての選択肢に当てはまれば3点、全ての選択肢に当てはまらなければ6点と、3・4・5・6の4点に換算される。これを合致度の高い順から、合致度最大、合致度大・合致度中・合致度低に割り振った。これで、志望合致度の完成だ。この指標によって学生の望む将来像と企業のマッチングというものを計量化してみたい。各項目の進路満足との有意確率は仕事内容(0.000)、大学での専門との関連(0.136)、給与(0.592)、仕事と余暇のバランス(0.257)、縁故(0.573)、地域条件(0.563)である。

<内定獲得数・内定獲得時期>

この指標は、問25(2)「就職活動中、いくつかの企業に対して次のようなことをおこないましたか(dのみは企業からのアプローチ)。まったくない場合は0(ゼロ)と記入してください。」のc)内定をもらった企業という問いと、問25(3)「はじめて内定をもらったのはいつごろですか。何年生の何月かを記入し、さらに次の1から3のなかから当てはまる時期をひとつ選んで○をつけてください。内定をもらっていない場合は、「4.もらっていない」に○をつけてください。」の問いをもとに作った。具体的には、値を分かりやすいように再振り分けした。

まず、被説明変数である進路満足度の度数分布を調べた(巻末資料参照)。回答内容は満足:52.1%、どちらかといえば満足:29.5%、どちらとも言えない:12.8%、どちらかといえば不満:3.0%、不満:2.5%とある程度分散しているため、この変数は分析対象となると判断できる。

つぎに、説明変数となる志望合致度と内定獲得数と獲得時期の度数分布を見てみよう（下図参照）。志望合致度の度数分布を見ると、こちらも合致度最大は3.7%、合致度大31.8%、合致度中55.0%、合致度低9.5%とある程度のばらつきがあるため、分析を続けることにする。

		志望合致度			
		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	合致度最大	12	3.0	3.7	3.7
	合致度大	104	25.9	31.8	35.5
	合致度中	180	44.8	55.0	90.5
	合致度低	31	7.7	9.5	100.0
	合計	327	81.3	100.0	
欠損値	システム欠損値	75	18.7		
合計		402	100.0		

初内定の時期も内定獲得数も度数に一定程度ばらつきが見られるため、分析対象として調査を進める（巻末資料参照）。

11.2 志望合致度と満足度の関係

次に、志望合致度と卒業後の進路満足との関係を調べてゆく。個人の望む将来像に合致した職に就けたかどうか、実際の進路満足感にどれほど影響を与えているかを知るために、卒業後の進路満足と志望合致度をクロス集計にかけた。結果が次ページの上の表である。合致度最高の人83.3%が進路に満足し、逆に合致度低の人は9.7%しか進路に満足していない。仕事に対する希望が今の就職先とより合致している人ほど進路満足度が高いことがこのグラフから見てとれる。

11.3 内定獲得時期・内定数と満足度の関係

次に、内定獲得時期とその数について検証する。就職活動の頑張りに対して見合った時期に見合った数の内定を得ていれば、それが進路に対する満足度と関係するかも知れないというのが、私の考えである。内定獲得時期とその数のデータを進路満足度とクロス集計にかける（次ページ下の表、および303ページの表）。結果は思っていたよりもはっきりしたものではなかった。内定をもらえる時期が早いことや、その数が多いことが直接進路の満足感につながるわけではないようだ。頑張っていた人にとっては、その分の結果として沢山の企業から手をひかれることには意義があるが、沢山の会社ではなく絞り込んだ会社を目指す学生にとっては沢山の企業から内定を得ることに意味はないようであった。取り組み方に見合った結果が出たかどうか

か、という仮説を検証するためには、もう少し詳細なデータが必要なかもしれない。

志望合致度 と 進路への満足度 のクロス表

		進路への満足度			合計
		どちらかといえば		どちらともいえない	
		満足	満足		
志望合致度	合致度最大	10 83.3%	2 16.7%	0 .0%	12 100.0%
	合致度大	64 61.5%	33 31.7%	7 6.7%	104 100.0%
	合致度中	102 56.7%	45 25.0%	33 18.3%	180 100.0%
	合致度低	3 9.7%	15 48.4%	13 41.9%	31 100.0%
合計		179 54.7%	95 29.1%	53 16.2%	327 100.0%

p<.001

q25_3[最初の内定をもらった時期] と 進路への満足度 のクロス表

		進路への満足度			合計
		どちらかとい		どちらとも	
		満足	えば満足		
q25_3[最初の内定を もらった時期]	3年2月以前	22 56.4%	13 33.3%	4 10.3%	39 100.0%
	3年3月	20 57.1%	10 28.6%	5 14.3%	35 100.0%
	4年4月	58 60.4%	27 28.1%	11 11.5%	96 100.0%
	4年5月	29 49.2%	20 33.9%	10 16.9%	59 100.0%
	4年6月以降	36 45.6%	22 27.8%	21 26.6%	79 100.0%
合計		165 53.6%	92 29.9%	51 16.6%	308 100.0%

q25_2c[接触した企業の数: 内定] と 進路への満足度 のクロス表

		進路への満足度			合計
		満足	どちらかといえ ば満足	どちらとも いえない	
q25_2c[接触した企業の 数: 内定]	なし	9 34.6%	9 34.6%	8 30.8%	26 100.0%
	1社	62 49.2%	39 31.0%	25 19.8%	126 100.0%
	2社	51 54.3%	25 26.6%	18 19.1%	94 100.0%
	3社	19 48.7%	16 41.0%	4 10.3%	39 100.0%
	4社以上	30 65.2%	10 21.7%	6 13.0%	46 100.0%
合計		171 51.7%	99 29.9%	61 18.4%	331 100.0%

11.4 公務員試験と満足度の関係

調査を進めていく過程で、以上の二つ以外にも興味深いデータを見つけたため記載しておく。そのうちのひとつが公務員・教員採用試験と卒業後の進路満足の関係性を表す表である（次ページの表）。この表を見ると、公務員・教員採用試験を受けたが不合格だった人の進路満足が低い他の二つに比べてかなり低いことが分かる。このように、進路に対する不満を感じる人の三分の一ほどは、公務員や教員の採用試験に向けての取り組みが報われずに不合格だった人であることが分かった。

11.5 おわりに

このレポートでは、卒業生アンケートを使って「個人の望む将来像に合致した職に就けたか」と「就職活動への取り組み方に見合った結果がでたか」がどう進路の満足度に関係するかを調べた。結果として、進路の満足度は、将来像に合致した職に就けていけば高くなることが実証された。一方で、内定数や内定を得た時期とそれぞれの学生の就職活動に対する取り組み方を合致させて調べるのが出来なかったため、内定獲得数と内定獲得時期と進路満足度の関係性がはっきり浮かび上がってこなかった。この点は、もう少し詳細なデータを使って検証しなおさなければいけない。しかしながら、内定の数や時期だけが就職活動の成功を決めているわけではないということは検証された。

つまり、第一回社会学部卒業生アンケートから述べることができるのは以下の2点であろう。満足はいく就職活動を終わらせるために、自分の望む将来像をはっきりさせること。そして周りが内定を獲得し始めて焦ってきても、大切なのは内定の数や内定を得た時期ではないということを心にとどめて、自分のペースで最後まで頑張ること。この2点が社会学部の先輩たちが就職活動生に残してくださったアドバイスなのかもしれない。

q27[公務員・教員採用試験]と進路への満足度 のクロス表

		進路への満足度			合計
		満足	どちらかといえば満足	どちらともいえない	
q27[公務員・教員採用試験]	受けていない	173 53.7%	95 29.5%	54 16.8%	322 100.0%
	受けて合格した	25 78.1%	5 15.6%	2 6.3%	32 100.0%
	受けたが不合格だった	7 21.2%	12 36.4%	14 42.4%	33 100.0%
合計		205 53.0%	112 28.9%	70 18.1%	387 100.0%

p<.001